
新撰組散文詩

火渡 紅弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新撰組散文詩

【Nコード】

N2891C

【作者名】

火渡 紅弥

【あらすじ】

史実に沿った新撰組の日常を綴ります。ことの始まりは試衛館。浪士組に参加し、京にくり出そうと、今、近藤等が立ち上がる！（この小説は史実に沿って100のお題形式で進めていきます。（お題サイト↓<http://nessal.web.fc2.com/odai/bakumatu.html>）その上で、オリキャラ、『龍也』が出てきますが、彼は史実には全く関係ありません。）

1、始まり

「近藤さん！！京に行くって本当か！？」

試衛館道場。

そこで稽古の掛け声にも負けない大声が響く。

「落ち着け、龍也^{りゅうや}」

「これが落ち着いてられっかよ！　で、どうなんだ！？　本当なのか！？」

「ああ、近々浪士組、と言うものが結成されるそうだな。我等試衛館一同、志願しようと思っとなるんだ。なあ、トシ？」

「そういうことだ」

文久二年。

浪士組募集の知らせが入った。

江戸幕府将軍・徳川家茂の上洛により、その警護のための浪士組を結成させる。

将軍様をお守りするため、京の都で名を上げるため、近藤達は諸手を挙げた。

「京……ですか。どうせ僕は子供だからって連れて行ってくれないんでしょうね」

「なにいつてる、総司。お前も行くんだぞ」

「本当ですか！！行っているんですか！？」

「ああ、お前も大切な試衛館の一員だ」

「僕、姉上に知らせてきます！！有難う、近藤さん！」

いつも子供扱いされていた総司には、この上なく嬉しいことだった

に違いない。

いくら剣の腕が良いとはいっても、未成年。酒の席などではどうしようも無いことなのだが、やはり疎外感を感じていたのだろう。

やっと自分を認めてくれた。そんな風に思えるのも無理ないことだ。しかし、総司も試衛館の門下生。

此処で総司を置いて行けるほど、近藤は野暮ではない。

言ってしまうば、近藤は沖田に甘いのだ。

近藤だけではない。

土方だろうが、山南だろうが、龍也も原田も永倉も藤堂も沖田に甘い。

つつい甘やかしたくなってしまう。沖田はそんな雰囲気を持った少年だった。

「さて、山南さん」

「はい」

「新八」

「はいはい」

「左之」

「おう！」

「平助」

「なんだい」

「龍也」

「はいよ」

「……トシ」

「……ああ」

「行くぞ！！京の都へ！！我等試衛、尽忠報国の志の下、將軍様のためにこの身を捧げようではないか！！」

彼等の物語は、始まったばかりである。

2、出会い

文久三年。

浪士組は京に向う行列の真っ最中だった。

「だー！！疲れた！！」

「うるせえぞ、龍也」

「うっせー土方。飽きたんだよ！何にも起こんねえんだもんよ」

「馬鹿野郎。起きてたまるか」

「こんなん、俺等が居る意味無いじゃん！！」

「黙ってろ阿呆」

常に眉間に皺を寄せている土方に対して、此処まで暴言を吐けるのは、試衛館内でも龍也と沖田だけだ。

土方は仏頂面で軽くため息をつきながら歩いている。

言うなれば土方は、龍也と沖田の保護者なのだ。

辺り構わずふざけ放題の龍也と、何かと幼い故の無作法な振る舞いが目立つ沖田には、土方のような躰役が居ないと大変なことになる。

「もーいい。土方も遊んでくんねえなら、ちよっと他の隊覗いてくる。」

「デメエ、ちよっとは大人しく……」

「総司はどうする？一緒に行くか？」

「んー。僕は遠慮しておきます。土方さんは僕が抑えておきますから、楽しんできてください」

「総司！！」

「あーりがと、総司！！土方は任せた！！」

「龍也！！」

「じゃーな！」

言うが早い、龍也はさっさと走って行ってしまふ。

龍也は相当足が速く、いまさら追いかけても追いつけそうに無い。今度こそ土方は盛大にため息をつき、眉間の皺を数本増やしながら歩き出す。

後ろに続く永倉、原田、藤堂は、笑をこらえるのに精一杯だった。

「たつく。土方は堅物だな……っと。お、なんか変わった奴が居る」
目敏く列から外れて歩いている人物を発見し、龍也は駆けていく。近づいてみれば、どこか態度のでかさうな人物が、鉄扇を片手に歩いていた。

「こんにちは。おにーさん、浪士組の人でしょ？ 列から離れちゃ駄目じゃん」

「そういうお前も列から離れてるだろ」

「ありゃ、これは盲点だった。ところでおにーさん、お名前は？」

「聞きたきやお前から名乗れ」

「これは失敬。俺は龍也。性は……そうだな、近藤、とても名乗ったか」

「近藤……？」

「で、おにーさんは？」

「芹沢鴨」

「ああ。あの噂に名高い芹沢先生か」

芹沢は浪士組に加わってから、随分と勝手を通してきた。

噂に名高い、と言うよりかは悪名高い、と言った方が適切かもしれない。

もっとも、龍也はそんな噂など大して気にも留めていなかった。ただ、どうやら腕はかなり立つらしいと聞いていたので、少し会っ

てみたい、と考えていた程度だ。
ただちよつと会ってみて、手合わせできたらいい、と考えていた程度だ。

ここで逢えたのは幸か不幸か。

偶然に見つけられたはいいが、今は進軍の只中。

無闇に喧嘩などをして、近藤を困らせるのは忍びない。

「残念。今が進軍の最中じゃなかったらちよつと喧嘩できたのにな」

「ほう。この俺と手合わせを自ら願ひ出るか。命知らずな奴だ」

「命知らずかどうか……試して、みるか？」

龍也の声音ががらつと変わった。

瞬時に辺りの空気も、張り詰めたものになる。

龍也の笑顔はいつものそれとは違い、何か真剣みを帯びていた。

それに一瞬たじろぎはしたものの、芹沢も真剣な顔つきになる。

しばし二人は見つめあい、刀に手をかざす。

「……って言いたいのはやまやまなんだけどな。今試してるわけにはいかんのよ」

先に緊張を解いたのは、龍也だった。

表情も、いつもの余裕を含んだ笑みに戻っていた。

「今此処であんたと喧嘩したら、近藤さんに迷惑がかかるからねえ。それに、行列に置いてかれちまう」

「……」

「さあさ。戻ろうぜ、芹沢先生」

「……ふん。中々に面白い男だ。気に入った。龍也か。覚えておいてやろう」

「それはどうも、光栄だね」

しばし談笑しながら、各々自分の隊に帰っていった。

「龍也。どうだったの。他の隊は」

「おお、平助。面白い人見つけたぜ。強そうでな奴で。名前覚えられちゃった」

「ほお、どんな奴だ？」

「知ってんだろ、芹沢鴨」

「……マジかよ」

その名前が出たことに、少々驚きが隠せないようだ。無理も無い。

龍也こそ気にしていなかったが、あの悪名高い芹沢鴨である。

人との馴れ合いを好まないだろう、あの芹沢の事を面白いといい、あまつさえ、名前を覚えられたとまで言ったのだ。

驚かない者のほうが少ないだろう。

「おい、お前等。もう町に入る。しばらく黙っとけ」

「はい」

この時点では、誰も予測なんて出来なかっただろう。近藤の犯した失態と、この夜の出来事なんて。

「おい、何これ。どうなってんの？何が起きてんの？」

「龍也、良かったな。お前の好きな面倒ごとだ」

「うへえ。こういうのは好きじゃないんだけど」

「選り好みするな。手伝って来い」

「土方も来いよ」

「言われなくてもすぐに行く」

この日、近藤は芹沢組の宿を取り忘れていた。そのことに腹を立てた芹沢は、焚き火と言って往来のど真ん中で盛大に火を燃やしていた。

辺りの民家から所構わず板だの木だの、燃えそうなものを引き剥がしながら、どんどん火にくべていく。

「ちょ、ちょっと芹沢さん。何やってんの」

「龍也か。見て分らんか？焚き火を燃やしているんだ、寒くて寝られやしねえからな」

「はぁ？ちよっと待ってろって言ってただろ？すぐ宿を手配してくるって」

「待てねえな」

そう言っている間にも、火は勢いを増していく。

皆躍起になって消火を行うも、火の勢いに圧倒されて、大して効果を挙げていない。

「芹沢さんさあ。俺はもっと芹沢さんは大人だと思ってたよ」

「何？」

「馬鹿みたいだってこんな。いまどき餓鬼でもこんな幼稚なあてつけなんてしないって」

「龍也……そんなに斬られてえか……」

「斬れるものなら……斬ってみるか？」

炎に照らされながら、二人は対峙する。

今は進軍中ではない。

ある意味、絶好の機会とも言えた。

「俺を怒らせる前に退け」

「やーだね。大体俺、負ける気しねーもん」

口調こそ何時と変わらないものの、やはり昼間同様、真剣みを含んだ笑いを浮かべていた。

いや、残虐性を含んだ、といった方が適當かもしれない。それほどまでに龍也は、戦いに対して興奮していた。

「……斬るぞ」

「斬れるものなら斬ってみろ——」

「——龍也！！やめんか！！」

「近藤さん！？」

まさに斬りかからんとする瞬間であった。

近藤が駆けつけたのだった。

「龍也！！お前と言う奴はつくづく聞き分けの無い奴だな！！」

「うえ、ごめんなさい……」

「芹沢先生、申し訳ない。家の龍也が無礼を働いてしまった」

「えー、初めに斬ろうとしたのはあっちだぜ？」

「少し黙っていなさい」

「……ごめんなさい」

どうやら近藤は芹沢組の宿を探してきたようだった。

少し息が乱れている。

「芹沢先生。宿の用意が整った。どうか騒ぎを収めて下され」

「……しょうがねえ。龍也に免じて、従ってやろう」

「は？俺？」

「お前は本当におもしろい男だな。いつか本気で刀を交えてみたい

ものだ」

「おお！何時でも受けてたってやる！」

「ではな」

「じゃーなー！！」

こうして、芹沢は去っていった。

近藤は呆れた視線を龍也に送らずには居られなかった。

こうして、この日の夜は更けていった。

3、日常

「なあ、新八」

「何か？」

「すつげえ暇なんだけど」

「俺に言われてもねえ」

壬生村八木邸。浪士組の滞在場所となっている。

試衛館一同、芹沢派一同は一つ屋根の下。

一触即発の空気の中、生活している。

しかし、龍也だけは何にも囚われず、自由気ままな生活を送っていた。

土方をからかったり、沖田と遊んだり、芹沢と話したりといったように、この上なく自由に、何も考えずに日々を送っていた。

「新八。かまえ。遊べ」

「やれやれ、うるさいお子様なこと」

「誰がお子様だ、誰が」

「龍也以外に誰が居るって？」

縁側に並んで座っている、身長差の激しい二人。

小さい方は龍也、大きいほうは永倉新八だった。

気さくな永倉は、なにか文句を言いながらもいつも龍也の話し相手になっている。

穏やかにやんわりと話を受け止め、何気なく返事をする。

そんな永倉の喋り方が、龍也は好きだった。

「暇だなあ。稽古……も面倒くさいし」

「これこれ。そんなこと言うもんじゃないよ」

「土方では遊び飽きたし」

「お前、いい加減にしてやらないと、土方さんの胃に穴開くからな」

「総司が居ればなあ」

「ああ、お前等同年だっけねえ」

実際のところは龍也の方が一つ上だ。

しかし、そんな大した差がある訳でもなく、何より龍也本人が面倒くさいので、あえて訂正したりはしない。

年の差なんか関係ない。全て生き方次第。それが龍也の自論でもあった。

「暇だな〜っと。左之及び平助発見！おおい！左之！！平助！！」

「何だ何だあ？でっけー声出しやがってよお」

「何？何かあったの？」

「暇だ！！かまえ！！」

「はああ？お前なあ……」

「なるほど、龍也らしいな」

原田は呆れ顔、藤堂は何か納得したような顔で龍也を見た。

原田左之助は豪気な頼れる兄貴分。

腹に切腹の後があるので「死そこないの左之」という異名も持った、血気盛んな人物である。

藤堂平助は中途半端に幼い容姿の、でもお笑い要素を含んだ何かと楽しい人物だった。

この三人は皆、試衛館からの気の知れた仲間である。

いつも笑いを取り巻いていて、均衡のとれた三人組だった。

弟分の藤堂に、豪快な原田、気さくな永倉。

そこに龍也が混ざれば、ある意味ではもう誰にもとめられない集団ということでは有名だった。

剣の腕も中々のもので、龍也はよく手合わせを願い出ていた。

原田は槍術の達人で、これについても稀に龍也は稽古をつけてもらっている。

「ほら、暇じゃなか。何かしよーぜー」

「そうは言うけどよ」

「何にもすることが無いからねえ」

「だってさあ」

龍也の意見を永倉を原田でことごとく否定する。

藤堂は笑いながらのほほん、とその光景を眺めていた。

「じゃ、龍也、俺様の槍術の稽古をつけてやろうか？」

「ええー。それはそれで面倒くさい」

「だろお？俺だってめんどくせえの。つまり、今日みたいな日は動かないに限るってこったよ」

「そういうこと。龍也。僕も左之の意見に賛成」

「と、言うことで俺は寝る」

そういうが早いか、左之は縁側の柱に寄りかかって早速寝息を立て始めてた。

永倉を藤堂は目を合わせては、くすくすと笑いあっている。

左之は結構いつも寝ている。

起きているときはなんとも豪快だが、寝ているときはそれでも静かなものだ、と永倉は思う。

それでもやはり、いびきをかいているので、完全に静かだとは言いにくいものがあるのだが。

「さて、左之は寝ちゃったけど」

「どうしたものかねえ」

「……混ざるか」

「……だな」

「だね」

「あれ、皆さん気持ち良さそうですね。僕が買い物に言ってる間に皆は寝てるなんて。それじゃ僕が可哀想じゃないですかあ。……この光景、見てると真面目に仕事やってるのが馬鹿みたいに思えてくるなあ」

沖田は近藤に買い物頼まれていたのだ。

帰ってきて目に入っただものは、龍也、永倉、原田、藤堂の四人で、それぞれがそれぞれに寄りかかったり、足をのせたりして、気持ち良さそうに寝ている図であった。

「えーい、僕も混ざっちゃえ！」

「……む、やっべ、本気で寝てた……って、アレ？何この状況」

目を覚ました龍也の周りに広がっていた光景。

それは十数人の浪士組のものが、ごったがえして縁側に寝ている状況だった。

これが、日常。

これが、きつと幸せな日常。

4、平安

春先のまだ肌寒さが残るある日。
桜の蕾が膨らみ始めた頃。

「なあ、山南さん」

「何かな？ 龍也」

本を読む山南敬助と、その横に寝転がる龍也の姿があった。
温和そうな山南は、薄っすらと笑顔を浮かべながら、本を読んでい
る。

「……山南さんてさ。本好き？」

「好きだよ。面白いじゃないか。どうだい、龍也も」

「いんや、遠慮しとく」

そういつて、龍也はまただらしなく寝転がる。

山南は軽くため息をついてから、龍也に視線を向けた。

「何かあったかい？」

「ん。ちよつとね」

「僕でよかったら聞こうか？」

やっぱり優しいな、と龍也は思う。

いつも細やかに気遣ってくれる。

試衛館の時から、いつもそうだった。

近藤に怒らたときも。

土方に無視されたときも。

沖田と喧嘩したときも。

いつも一番初めに気付いたのは山南だった。
その性格から、山南は皆に慕われていた。

「だって酷いんだぜ。土方の奴、頭ごなしに人の意見却下しやがってよー」

「ほう。ちなみに、どんな意見だったんだい？」

「土方ってば苛々してたからさー。気晴らしに一緒に町に行こうぜって」

此処のところ、土方の機嫌は芳しくなかった。

それもそのはず。隊内で近藤一派と芹沢一派の対立が続いていたからだ。

芹沢達は、好き勝手にし放題であった。

特に金使いは酷く荒く、酒が入れば暴れる始末。

そんなことが続いていたため、土方の機嫌は降下の一途をたどっていた。

「お言葉だがね、龍也。君と一緒に町などに出たら、それこそ土方君は胃を傷めて倒れるだろうよ」

「どういう意味だよソレ」

「君はもう少し他人を慮る、という行為を学ぶべきだよ」

山南は割りとずばずばと物を言う。

それも、いつもの笑みを少しも崩さずに言うものだから、何か怖いものを感じる。

さらに、かなりの精度で痛い所を突いてくる。

反論が出来ないので、そのまま龍也は押し黙った。

「そんなに土方君が心配かな？」

相変わらずの微笑みで山南は問う。
龍也は押し黙ったまま。

「そうだな。そんなに心配なら……。どうだろう、町ではなく、花の咲いているところに連れて行ってみては」

「そんなん、あの土方には似合わねー」

「土方君の趣味を知らないのかい？」

「え、何？」

「俳句だよ」

土方は人知れず俳句をたしなんている。

豊玉という名を使って、部屋に籠って句を綴るのだ。
お世辞にも上手いといえる句ではなかったが。

「……土方にそんな趣味があったとはなー……」

「人は見かけによらないものだよ」

そんな会話をした数日後に、龍也と土方が川のほとりを散歩してたのだが、それはまた別のお話。

5、春

「はて、いつから会っていなかったか……」

壬生屯所、門の前。

無表情の男が一人、静かにたたずんでいる。

ぽつりと呟いた囁きも、奥から響く掛け声と竹刀の合わさる音に掻き消される程小さいものだった。

低い位置で結わえた髪が、風に弄ばれてさらさらと流れる。

「……行くか……」

不思議な男が一人、屯所の門を潜った。

「お前もつと力つけろー。はい、次ー」

「お願いします!!はぁ!!」

道場では、珍しく龍也が新人隊士の面倒を見ていた。

「もっと小回りきかせろー。はい次ー」

「お願いします!!」

向かってくる隊士の一撃を軽くないなして、打ち据える。悪いところを指摘して、また次の隊士の相手。

数十人の隊士を連続で相手をし続け、そろそろ五週目。

「なかなか良くなったが踏み込みが甘めえ。はい、次ー」

「お願いします!!」

いなして、打って、かわして、突いて。

「姿勢が悪くなってる。はい、次ーって、うおお!!」

突然、今までとは比べ物にならない速さで一つの影が龍也に向かった。

しっかりと受け止め、そこで龍也は目を丸くした。

「あー!!^{はじめ}一ちゃん!!」

「なかなかの動きをするようになったな」

「え! 嘘、本物!?! 久しぶりー元気だった!?!」

「龍也こそ」

突然道場に入り込んだ男の肩をばしばしと叩きながら、龍也は興奮気味に顔をほころばせた。

男のほうも、薄っすらと綺麗な微笑を浮かべている。

いきなりの二人だけの世界に、疎外された新人隊士は、戸惑いながらも龍也に声をかけた。

「ええと、龍也さん? この方はいったい……」

「おお、こいつは斉藤一って言ってな。試衛館からの仲間。故郷に用があるつつって帰ってたんだけど。ちゃんと浪士組の一員だぜ?」

斉藤も、試衛館道場の食客の一人だった。

しかし、やらねばならぬことがあり、浪士組として出発する前に試衛館を離れた。

「ちゃんと片付けてきたんだな」

「無論」

「おーし、お前等仲良くしろよー。ちなみにすっげ強いから気をつけろー」

よろしくお願いします、という新人隊士の挨拶に、首のみで返事を
して、斉藤は龍也に向き直る。

相変わらず嬉しそうに笑う龍也を、龍也より幾分高い背で見下ろし
て、薄っすら微笑みながら口を開いた。

「して、近藤さんは？」

「おお、挨拶しに行かねーとな。ついてこいよ、案内してやる」

そのまま龍也は、新人隊士になんの指示も出さないまま、斉藤の腕
を引っ張って歩き出す。

新人隊士のなかには、龍也を引き止められる者は居なかった。

「近藤さーん！」

「おお、龍也か。どうした？」

「ふっふっふ。聞いて驚け見ても驚け！なんと一ちゃんが帰ってき
たー！！」

「ご無沙汰しております」

「お……おお！！斉藤君ではないか！！久しいな！何時ぶりだ！？」

近藤も子供のような笑顔で斉藤を見つめる。

斉藤は実は、龍也と近藤の事を、猫と犬に似てると思っている
今もこうして斉藤を見つめる視線は、斉藤には小動物のそれにしか
見えない。

「戻ってまいりました。改めて、これからお世話になります」
「ああ、斉藤君なら大歓迎だ!!」

そのままかれこれ半刻。

話が弾み弾んで今に至る。

「では、某は荷物を片付けねばならぬ故」

「おお、引き止めて悪かった。して龍也」

「おあ？」

「お前は確か新人の指導を頼んでいたはずだが？」

すっかり忘れていた。

斉藤のことが嬉しすぎて、そんなこと頭の端にも残っていなかった。

「……て、てへっ！」

「さっさと行きなさい!!」

「え、ごめんなさい!!!」

どたばたと、騒々しい音を立てながら龍也は走っていった。
うるせーぞ龍也!! うっせー土方!! などという声も響かせながら。

「……変わっていない」

「ああ、変わらんさ。試衛館の頃とまったく、な」

「……いつまで……」

「む、今何かいったか？」

「いえ、では某はこれにて」

いつまで変わらずにいられるのか、と。

斉藤は道場のほうに視線を向けながら思った。
変わらずに居られる保障はない。

「だから悪かったってー!」

「龍也さん!! 俺達本当に困ってたんですからね!!」

しかし、変わらなければいい、と。

斉藤は柄にもなく、道場から響く会話に微笑みながら思った。

6、お花見

「あーあ。せっかく綺麗な夜桜なのに、な！」

桜より赤い血飛沫が舞う。

簡素な色の龍也の着物に、赤い色彩が加わる。

飛ぶ、飛ぶ、飛ぶ。

腕が飛ぶ、足が飛ぶ、首が飛ぶ。

だんだんと切れ味が悪くなってきた刀を捨て、先ほど頭が飛んだ屍から、綺麗な刀を拝借して。

「明日は花見だったのに、その前夜にこの仕打ちはないよ、なあ！」

台詞の最後に力を込めて。

そのたびにまた一つ、命が減っていく。

龍也の回りから聞こえる荒い息遣いも、一つ、また一つと消えていく。

浴びつつけている返り血を払うことも無く。

斬る、斬る、斬る。

「こんな雑魚の血で、綺麗な桜を汚したくなかったんだけ、ど！」

月明かりに照らされた龍也は、妖艶な笑みを浮かべていた。

舞うような動きで、まるで剣舞でも見ているかのような錯覚。

舞う血飛沫は紙ふぶき、散る桜は光の粒子。

実際龍也にはそう見えていたのかもしれない。

人間の死に免疫が無い人ならば、吐き気を覚えても不思議では無い空間に、まだ二十歳にも満たない少年が、笑いながら立っているのだ。

「ま、これもお国のためだ。成仏してくれ、よ！」

最後の一人を横一線に切り払い、ふっ、と息を一つ吐いた。

さらさらと龍也の長い髪を攫う風の先には、先ほどから花卉を散らしている桜の木があった。

背景に月を背負い、それは素晴らしい情景を作っていた。

「血染めの桜ってのも、案外綺麗なもんじゃねーか」

桜には、先ほど斬った不逞浪士の返り血がついていた。

ところどころの花弁が朱に染まり、なんとも艶っぽい、妖艶な雰囲気をも少し出している。

こんな柄の着物があれば、綺麗なんじゃないのかな、と。

龍也はそんな不謹慎なことを考えていた。

人を十数人斬ったというのに。

そんなことは微塵も頭がない、といった風に。

実際、龍也は最悪感も、痛みも感じていない。

「ごめんね、おにーさんたち。でもおにーさんたちが弱いのがいけないんだぜ？」

足元に転がる屍に視線を向け、無邪気に、とても無邪気に笑った。

「俺のために死んでくれてありがとう」

先ほど捨てた、脂で切れなくなった自分の刀を拾い上げ、一番近くに転がっていた屍の袖口を借りて、刃をぬぐった。

月明かりに鈍く輝くそれは、人の命を吸ってなお、光り輝いているようだった。

勿論それは錯覚で、名刀でも妖刀でもないそれは、龍也の腰にある鞘にきれいに収まった。

「俺一人だけこんな綺麗な花見が出来ちゃって。役得役得っ！」

そう言って岐路につく龍也の姿は、黒ずんだ血に染まっていた。

7、光

「総司！今から近所の子達と鬼ごっこやるんだ！混ざれ！！」
「本当ですか！？わあ、鬼ごっこなんていつ以来でしょう？」

子供に混じって、明らかに大きい二人。

しかし、違和感がないほどに幼い笑顔を振りまいている二人は、沖田と龍也だった

子供相手に本気で逃げて、その度に小賢しい手を使ってくる子供達の攻撃を精一杯かわす。

子供がそのまま大人になった、というよりは、図体の大きい子供といった方が適切であるほどに、二人は子供じみていた。

「龍也兄ちゃん、つーかまーえた！」

「あ、チクショウ！」

「龍也、あんまり汚い言葉を教えちゃ駄目ですよー！」

「全速力で逃げながら言うなよ！」

薄曇りの空の下だった。

あまり明るいとは言いがたい壬生寺の境内。

鬼ごっこ、色鬼、石蹴り。

時間も忘れ、騒ぎ遊び走り回った。

そのうちにぽつ、ぽつ、と沖田の頬に水滴がかかった。

「わ、皆さーん！降ってきましたよー！」

「皆避難だ！そこの屋根の下まで走れー！」

雨が降ってきても楽しそうに、笑いながら走る。

全員が屋根の下に入った瞬間、ざあざあと凄まじい雨が降り出した。

「おお、早く避難してよかったな」

「それより、二人とも足はえーよー」

「はっはっは。お前らも精進しろ」

「龍也は大人げなさすぎですよ」

「俺を見捨てて全速力で逃げやがったくせに」

にしてもなー、と龍也は呟く。

空を見上げ、ため息を一つ。

「もっと天気が良いればよかったんだけどな」

「きつと通り雨ですよ。もしかしたら見れるかも……」

「総司兄ちゃん。何が見えるのー？」

「お楽しみです。もう少し待っていてください」

皆で雨が降る空を見上げる。

しばらくして、雨が上がる兆しが見えた。

雨音が静かになり、雲がわれる。

雲間から光が射し込み、照らされた水滴がキラキラと輝く。

「……ほら、見えますか？」

「あ……虹だ！」

沖田が指差した先には、見事な虹がかかっていた。

塗れた土の香り、潤った空気、雨上がりの空。

素晴らしい情景は、皆を感嘆させ、虹の架け橋は俗世から身を隠すように、ふっと消えた。

「あーあ。消えちゃった」

「少ししか見ることができないから、素晴らしいと思えるんですよ」
「……よし、お前ら！鬼ごっこ再開だ！」

そう言って駆け出す龍也の後に、皆は続いた。

その顔には、光りを受けた雫より輝く笑顔が浮かんでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2891c/>

新撰組散文詩

2010年10月30日17時13分発行